

7月24日に日立基礎研究所で行われるセミナー  
の原稿です。学生諸君には少し難しいかも知れない  
ものですが、読んで理解するよう試みてください。  
量子力学 II の講義では、何回か量子化そのものの  
難しさを話しましたが、量子化に対する一つの  
新しい考え方だと思っています。

# 量子化のお話

日大理工物理 藤田丈久

[0] スピンと統計のお話（付録）

[1] 量子化 (first quantization)

\*\*\*\* 量子化は正準か？ \*\*\*\*

[2] 量子化の原理

[3] 場の量子化 (second quantization)

[4] QED の繰り込み理論以降の理論物理

[ 於 日立基礎研究所 (7/24) ]

## [0] スピンと統計

半整数スピンの粒子はフェルミオン

整数スピンの粒子はボソン

\*\*\*\*\*

(a) 実験事実 :

\*\* 電子は スピンの  $\frac{1}{2}$  であり、フェルミオン

\*\* 光 (photon) は スピンの 1 であり、ボソン

これは、はっきりわかっている \*\*\* しかし

$^4\text{He}$ — 原子はボーズ・アインシュタイン統計

$^3\text{He}$ — 原子はフェルミ・ディラック統計

に従うという . これは、本当なのか??

(b) 理論： 電子に関しては証明が可能

\*\* \*\* \* **複合系** : これは全く不明 \*\* \*\* \*

(c) 直感的な描像： 原子の物性は電子で決まる

\*\* \*\* \* 原子核のスピンが何故、影響するか？

\*\* \*\* \* 強磁場なら、原子核スピンの影響がある  
( Zeeman 効果 )

\*\* \*\* \* 磁場無しでも、統計物理に影響するか？



\*\*\*\* **統計力学で何か理解してない事がある！**

\*\*\*\*\* 実験で検証されるべき \*\*\*\*\*

# [1] 量子化 (first quantization)

\*\* \*\* 量子化  $\implies$   $\boxed{p = -i\hbar\nabla}$

\*\* \*\* 正準量子化  $\boxed{[x_i, p_j] = i\hbar \delta_{ij}}$

\*\* \*\* しかし、これが正準(標準)でない事は明らか

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*  $\boxed{\text{簡単な解説}}$  \*\*\*\*\*

極座標での自由粒子のハミルトニアン：

$$H = \frac{p_r^2}{2m} + \frac{p_\theta^2}{2mr^2} + \frac{p_\varphi^2}{2mr^2 \sin^2 \theta}$$

ここで  $p_r, p_\theta, p_\varphi$  は一般化運動量

\*\*\* この時、正準量子化は

$$[r, p_r] = i\hbar, \quad [\theta, p_\theta] = i\hbar, \quad [\varphi, p_\varphi] = i\hbar$$

\*\* だとすると  $\implies$

$$H = -\frac{\hbar^2}{2m} \left( \frac{\partial^2}{\partial r^2} + \frac{1}{r^2} \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} + \frac{1}{r^2 \sin^2 \theta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \right)$$

\*\*\*\*\* これは正しくない (エルミートでない) !!!

\*\*\*\* 正しいハミルトニアンは勿論 :

$$H = -\frac{\hbar^2}{2m} \left( \frac{1}{r^2} \frac{\partial}{\partial r} r^2 \frac{\partial}{\partial r} \right) - \frac{\hbar^2}{2mr^2} \left( \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} \sin \theta \frac{\partial}{\partial \theta} + \frac{1}{\sin^2 \theta} \frac{\partial^2}{\partial \varphi^2} \right)$$

## [2] 量子化の原理

\*\* \*\*  $p = -i\hbar\nabla$  は突然出てきたのか??

\*\*\*\*\* 最も信用できるのは、Maxwell 方程式

(注： Maxwell 方程式は量子化されている！)

\*\*\* それとゲージ不変性 \*\* これを原理にする

\*\*\*\*\* ゲージ不変性 とは何か？

\*\*\*\*\* 簡単な解説  $\implies$

$$\nabla \cdot \mathbf{E} = \rho, \quad \nabla \cdot \mathbf{B} = 0$$

$$\nabla \times \mathbf{E} = -\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t}, \quad \nabla \times \mathbf{B} = \mathbf{j} + \frac{\partial \mathbf{E}}{\partial t}$$

この式の未知関数は  $E_x, E_y, E_z, B_x, B_y, B_z$  の 6 個

方程式の数は、やはり 6 個 だから解ける

ベクトルポテンシャル  $\mathbf{A}$ ,  $A_0$  を導入

$$\mathbf{B} = \nabla \times \mathbf{A}, \quad \mathbf{E} = -\nabla A_0 - \frac{\partial \mathbf{A}}{\partial t}$$

この時、Maxwell 方程式は

$$\nabla \cdot \left( \nabla A_0 + \frac{\partial \mathbf{A}}{\partial t} \right) = -\rho \quad (1)$$

$$\nabla \times (\nabla \times \mathbf{A}) = \mathbf{j} - \frac{\partial}{\partial t} \left( \nabla A_0 + \frac{\partial \mathbf{A}}{\partial t} \right) \quad (2)$$

この式は 3個、未知関数は  $A_x, A_y, A_z, A_0$  の 4個

\*\*\*\*\* 数が合わない !!! \*\*\*\*\*

\*\*\* ゲージ固定 (1個、未知関数を手で減らす)

何故それで良いのか?  $\implies A, A_0$  は観測量でない

\*\*\*\*\*  $E, B$  は正しく求まるのでOK



\*\*\*\* ゲージ不変性が相互作用の形を決める \*\*\*\*

自由粒子の Lagrangian (古典力学)

$$L = \frac{1}{2}m\dot{\mathbf{r}}^2$$

⇒ ゲージ不変な Lagrangian

$$L = \frac{1}{2}m\dot{\mathbf{r}}^2 + g(\dot{\mathbf{r}} \cdot \mathbf{A} - A_0)$$

電磁場との相互作用の形が決まる ( $g$  は定数)

ゲージ変換:  $\mathbf{A} \rightarrow \mathbf{A} + \nabla\xi(\mathbf{r}, t)$ ,  $A_0 \rightarrow A_0 - \frac{\partial\xi(\mathbf{r}, t)}{\partial t}$

この時、Lagrangian は

$$L \Rightarrow L = \frac{1}{2}m\dot{\mathbf{r}}^2 + g(\dot{\mathbf{r}} \cdot \mathbf{A} - A_0) + \frac{d\xi}{dt}$$

となり、全微分項は影響しない ⇒ ゲージ不変

\*\*\*\* Maxwell 方程式とゲージ不変性 から

\*\*\*\* Dirac 方程式を求める \*\*\*\*

Maxwell 方程式を与える Lagrangian 密度は

$$\mathcal{L} = -gj_{\mu}A^{\mu} - \frac{1}{4}F_{\mu\nu}F^{\mu\nu}, \quad F_{\mu\nu} = \partial_{\mu}A_{\nu} - \partial_{\nu}A_{\mu}$$

Lagrange 方程式  $\partial_{\mu} \left( \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial(\partial_{\mu}A_{\nu})} \right) = \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial A_{\nu}}$  より

Maxwell 方程式は

$$\partial_{\mu}F^{\mu\nu} = gj^{\nu}$$

と求まる。これは、式 (1), (2) と全く同じ。

(注：以下の議論では  $\hbar = 1$ ,  $c = 1$  としてある)

\*\*\*\*\* しかし、  $\mathcal{L} = -gj_\mu A^\mu - \frac{1}{4}F_{\mu\nu}F^{\mu\nu}$

はゲージ変換で不変でない。  $(j_\mu A^\mu)$  がゲージ依存

$j_\mu$  は物質のカレント密度。

Lorentz 変換による対称性 から

$j_\mu = C_0 \bar{\psi} \gamma_\mu \psi$  と決まる。  $C_0$  は  $g$  に繰り込む。

ここで、Lagrangian 密度のゲージ不変性 を要求

ゲージ変換：  $\psi \rightarrow e^{-ig\xi}\psi, \quad A_\mu \rightarrow A_\mu + \partial_\mu \xi$

で不変であるためには

$$\Rightarrow \mathcal{L} = i\bar{\psi}\partial_\mu\gamma^\mu\psi - g\bar{\psi}\gamma_\mu\psi A^\mu - \frac{1}{4}F_{\mu\nu}F^{\mu\nu}$$

と決まる。

この Lagrangian 密度に

\*\*\*\* **質量項** を加える ( Lorentz スカラー量 )

$$\mathcal{L} = i\bar{\psi}\partial_{\mu}\gamma^{\mu}\psi - g\bar{\psi}\gamma_{\mu}\psi A^{\mu} - m\bar{\psi}\psi - \frac{1}{4}F_{\mu\nu}F^{\mu\nu}$$

\*\*\*\* 質量  $m$  は実験から決められるべき定数

この Lagrangian 密度から Dirac 方程式が求まる

$$\left(-i\nabla \cdot \boldsymbol{\alpha} + m\beta - \frac{g^2}{r}\right)\psi = E\psi$$

**運動方程式が基** :  $\implies$  量子化  $p = -i\nabla$  は結果

\*\*\*\* このため \*\*\*\*

$\implies$  Klein-Gordon 方程式は導出できない!

### [3] 場の量子化

実験：水素原子の  $2p_{1/2}$  から  $1s_{1/2}$  への遷移

\*\*\*\*\* 光（電磁波）が作られる \*\*\*\*\*

\*\* 場の量子化が必要（参考になる理論はない！）

\*\*\*\*\* 電磁場の量子化：

$$A(x) = \sum_{\mathbf{k}} \sum_{\lambda=1}^2 \frac{1}{\sqrt{2V\omega_{\mathbf{k}}}} \epsilon(\mathbf{k}, \lambda) [c_{\mathbf{k},\lambda} e^{-i\mathbf{k}x} + c_{\mathbf{k},\lambda}^{\dagger} e^{i\mathbf{k}x}]$$

[  $\epsilon(\mathbf{k}, \lambda)$  は偏極ベクトル, 分散関係式は  $\omega_{\mathbf{k}} = |\mathbf{k}|$  ]

**場の量子化** :  $[c_{\mathbf{k},\lambda}, c_{\mathbf{k}',\lambda'}^{\dagger}] = \delta_{\mathbf{k},\mathbf{k}'} \delta_{\lambda,\lambda'}$

ベクトルポテンシャルがオペレータになった !!

⇒ 従って、固有状態を用意する必要がある

⇒ Fock 空間

⇒ 教科書 : 「Symmetry and its breaking in quantum field theory」

( 参照 )

## [4] QED 繰り込み理論後の物理

- (a) Wilson が証明した線形閉じ込め  $\implies$  間違い  
しかも、閉じ込めは QED での計算だった !!
- (b) 南部 - Goldstone ボソン  $\implies$  存在しない  
南部の計算：場の理論の真空の理解が不十分  
ただし、カイラル対称性は自発的に破れる
- (c) 繰り込み群  $\implies$  有限サイズ効果の予言である  
結合定数  $g$  が運動量スケール  $\mu$  に依る事は無い
- (d) QCD の摂動論は定義できない  
 $\Leftarrow$  クォーク・グルオンの自由場がゲージ依存  
 $\implies$  QCD の理解は 30 年前に逆戻り !!
- (e) 場による経路積分では場の量子化が出来ない  
Feynman の原論文は場を正しく量子化している  
 $\implies$  格子ゲージ理論の数値計算は物理的に無意味